

Title	ロドルフス・グラベル『歴史五巻』に見る修道院の生活
Sub Title	A monastic life in the eleventh century through Rodolfus Glaber's Historiae
Author	神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.44 (2013. 3) ,p.245- 268
JaLC DOI	10.14991/005.00000044-0245
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000044-0245

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロドルフス・グラベル『歴史五巻』 に見る修道院の生活

神 崎 忠 昭

ロドルフス・グラベル（980頃－1046頃）は、その奇矯な記述ゆえに、正確さを重んじる実証主義的な歴史家たちから「エキセントリック」「冗舌」「迷信的」「不正確」と弾じられてきた。だがロドルフスと彼の『歴史五巻』が、中世の修道士の生活や心を知るには、やはり「最高の証人」¹の1つであることは否定できない。この著作が何らかの組織の利害とも密着せず、ロドルフスは死去するまで手許から離さず、彼の「世界」を書き続けたと推測されるからである。『歴史五巻』は神学的前提を強く有してはいるが、ここには公式あるいは準公式の歴史書からはなかなか窺えない当時の修道士の生が溢れている。これまで筆者は『歴史五巻』について数本の論考を著わしたが²、なお興味深く感じられる点がいくつかある。本稿の目的は『歴史五巻』を通して、11世紀初めの修道院の生活のいくつかの面を垣間見ることにある³。

1 G.Duby, *L'An Mil*, Paris, 1967, p.21.

2 拙稿「夢はこわいー 11世紀ヨーロッパのある年代記から」『創文』402号（創文社 1998年）10-13頁；「千年目の年にーロドルフス・グラベルの『歴史五巻』に見る終末思想」歴史学研究会編『再生する終末思想』（青木書店 2000年）317-348頁；「修道士の「ものの見方」ーロドルフス・グラベルの『歴史五巻』における幻視と奇跡を通じて」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』32号（2000年）19-42頁；「ロドルフス・グラベルの『歴史五巻』における教皇と皇帝」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』33号（2001年）63-92頁。

3 なお本稿の一部は、拙稿「シンポジウム 地中海世界の旅人たちー中世から近世へーコメント4」『史学』（慶應義塾大学）第80巻2・3号（2011年）234-36頁に大幅に加筆したものである。

1) 修道士は旅する

ロドルフスは「放浪修道士 *gyrovagus*」と評されることがある。彼自身が、「こう告白しても赤面することはないが、私はわが両親の罪のうちに生まただけでなく、品行において相応しからず、行いにおいても許しがたく、それは語れぬほど多い。ある修道士、それは私の叔父であるが、彼の力によって俗世のきわめて逸脱した虚栄から引き離されて、12歳頃のとき私は修道服を身にまとった。だが、なんと悲しいことだろうか、それは衣が変わっただけであり、心は変わらなかった。師父たちや霊的兄弟たちによって、どのような穏当で敬虔なことが愛の精神によって私に示唆されようとも、私の荒々しい気質は増長し、膨れ上がった楯を心に抱いて、傲慢が命じるままに、救いをもたらすものが私に触れぬよう抵抗した。それによって私は長上たちには従わず、同輩たちには厄介者で、下僚たちには重荷となった。本当であると告白するが、あらゆる人にとって、私の存在は鬱陶しく、私の不在は彼らの安堵であった。そのために、前述の場所の兄弟たちは、これらのことに動かされて、私を彼らの共同体から放逐した」(*Historiae*, V, i, 3; p.220)⁴とある。

その後も、深く敬愛し師事したヴィレルムスと、「いくつかの私の過ちの咎から気分を害し、この方（ヴィレルムス）がそのとき不快でいらっしやると感じ、この方の支配下にはない共住修道院に移った」(*Vita*, xiii; p.294)とあるように、衝突し、クリュニーに身を寄せた。そこでも数年で去り、サン・ジェルマン修道院で晩年を過ごしていたが「私は、かつて当地（サン・ジェルマン修道院）で私の同僚であった修道士たちに、諸祭壇の碑銘をつくりなおすように依頼された。それらは昔に学識ある人々によって作製されたが、

1 これ以降、ロドルフスの著作は、*Rodolfus Glaber Opera*, John France, Neithard Bulst and Paul Reynolds (eds.), Oxford, 1989 を底本とし、『歴史五巻』は *Historiae*、また『聖ヴィレルムス伝』は *Vita* と略し、セミコロンの後に底本の頁数を付して、引用文の最後に明記することにする。

古くなり、ほとんどすべてが見えなくなっていたのである。これを、ふさわしくあるように、喜んで、できうる限り成し遂げようと努めた。(中略) 大きな教会の中には22の祭壇があり、それらに、適うべく、六脚韻詩でふさわしく碑銘をつくり、代緒^{たいしや}で飾って、聖人たちの墓誌を修復し、また幾人かの修道士の墓も同じようにすっかり飾るよう苦心した」(*Historiae*, V, i, 8; p.226)。だが事態は暗転し「この方(オディロ)の(クリュニー)修道院の兄弟たちから憎まれた者が(クリュニーを)去って私たちの許にやってきたが、いつもの彼らの習慣のように(ut mos illorum semper fuit)、この者は真心をこめて(サン・ジェルマン修道院に)迎え入れられた。しかし彼は妬みの毒をもって修道院長と一部の修道士たちを汚し、私に対して大いに敵意を煽り、祭壇のすべての碑銘を壊させた」(*Historiae*, V, i, 8; p.226)と不平を述べている⁵。ここに鼻つまみ者の修道士の姿を見出すのは容易であろう。だが仔細に検討してみると、ロドルフスの行状はそれほど異例ではなかったことが『歴史五卷』から窺える。

『歴史五卷』には多くの土地の見聞が記されているが、そこには旅した者ならではの感覚が表れているように見える。「地上世界の広大極まる空間を經巡り、あるいは舟を漕いで果てしない海原に分け入った者が、しばしば山々の頂や木々の高みを眺め、眼差しを投げかけて、それらを遠くから認めることによって、誤りなくどこに向かっているのか測るように、また私たちについても、私たちは過去のことどもを未来へと明らかにすることを欲するゆえに、記述する際には、いずれにせよ私たちの言葉の視線を、また同じように精神の眼差しをしばしば偉大な人々の人格へと差し延ばさなければならない。そうすることによって、記述そのものはより明らかになり、確実なものとなろう」(*Historiae*, II, i, 1; p.48)。歴史の「迷子」とならぬよう注意するのに、空間の広がり⁵の比喩を用い、歴史家を旅人に譬えているのである。

これらの経験の一部を、ロドルフスはヴィレルムスに随行することによっ

5 Fichtenau は修道士の競争心をここに見ている。Cf. Heinrich Fichtenau, *Living in the Tenth Century: Mentalities and Social Orders*, University Of Chicago Press, 1993, p.260.

て得た。たとえばロドルフスはスーザの贗聖遺物製造者について記録しているが、彼は「しばしば名を挙げた修道院長（ヴィレラムス）とともに、私もその地に行き、居合わせた」（*Historiae*, IV, iii, 7; pp.182-84）と述べている。ロドルフスとヴィレラムスの関係は親密で、ヴィレラムスの書簡2通をそのままのかたちで引用していることなどからも⁶、彼の祐筆の役を果たしていたとも考えられる。

ロドルフスは確かに奔放不羈な性格ではあるが、「[放逐した人々は]どこかに留まれる場所が、私の文才のために、私にないことはないであろうことを知っていた。そのことは実際しばしば実証された」（*Historiae*, V i, 3; p.220）と自ら記すほど、学才を誇っていた。ヴィレラムスは修道院改革に精力的に取り組み、「前述のヴィレラムスは鋭敏な知性と卓越した賢明さを有し、それゆえ王たちや他の君侯たちの宮殿において最高の地位を占めていた。ふさわしい司牧者が修道院に欠けると、常にヴィレラムスはすぐに王や伯や司教たちに強いられて、改革のために、その修道院を治めるべく受けざるを得なかった。なぜなら富においても聖性においても、彼の庇護下に置かれた修道院は他に優っているのが見て取れたから」（*Historiae*, III, v, 16; p.122）であり、「そのころ約40の共住修道院と修道房が、この方の庇護の下に安らかにあって、あらゆる善に富み栄え、それらの修道院には疑いなく1200名以上の兄弟たちが暮らして」（*Vita*, xii; p.286）いたが、その活動の始まりにおいてはディジョンのサン・ベニーニュ修道院の改革を委ねられたとき「主なるヴィレラムスが受け治めるために彼に定められた修道院に赴く際、クリュニーの優れた兄弟のうちから（師であるクリュニー院長）聖マイオールスによって彼と一緒に数名の者が派遣され、そこで名誉をもって迎えられ、司教ブルーノによって修道士たちの師父として習慣に則って聖別された」（*Vita*, vi; p.268）とあるように人材を欠いていた。のちにイタリアから戻ってきた際に「この方はキリストに仕えるにふさわしき者をあらゆるとこ

6 拙稿「ロドルフス・グラベルの『歴史五巻』における教皇と皇帝」70-73頁参照。

ろから集めるべく熱意をもって努力され、彼らに天上の生の栄光を説き、また地獄の罰を脅された。この方に、主は、他のさまざまな徳とともに、救いをもたらす言葉の大いなる徳を与えられた。それゆえ、この方の教えを受けた者たちすべてに、この方は強い信仰をもたらし、さまざまな善き徳を増し悪徳を矯正された」(*Vita*, x; p.280) ように、常にさまざまな人に働きかけたのかもしれない。またヴィレルムスは教育を重視し「炯眼なる師父は、この地（フェカン）だけでなく、この（ノルマンディ）地方全体、さらにはガリア全体において、特に平民たちの間で、読み詩編を唱える知識が欠けており無になろうとしているのを知り、聖職者のために聖なる礼拝の多くの学校を設け、神の愛に燃えてこの職務に精通する兄弟たちがこれらの学校にあった。ここでは、この方に委ねられた共住修道院に集うすべての者に教えの恩恵が無償で施され、そこへと達することを望む者はすべて、奴隷であろうと自由人であろうとも、富める者であろうと貧する者であろうとも、禁じられることはなく、誰に対しても変わらぬ愛徳の実例が示された」(*Vita*, vii; p.272) と描かれている。ロドルフスも、ヴィレルムスに鼓吹されて集った学識ある者たちの1人であったのかもしれない。

実際、ロドルフスがいくつかの修道院で暮らしたことを『歴史五卷』に名称を挙げて示している。オーセルのサン・ジェルマン修道院、レオムのムーティエ・サン・ジャン修道院、サン・レジェ・ド・シャンポー修道院、ムーティエ・サン・マリ修道院、ディジョンのサン・ベニーニュ修道院、クリュニー修道院、パーズのサン・ピエール修道院などである。それほど多くはない。これらのうちでムーティエ・サン・ジャン修道院、サン・レジェ・ド・シャンポー修道院、ムーティエ・サン・マリ修道院はサン・ジェルマン修道院に、サン・ピエール修道院はサン・ベニーニュ修道院に從属する修道院である⁷。ある程度長く留まったのは、結局、サン・ジェルマン修道院、サン・ベニーニュ修道院、クリュニー修道院に過ぎない。

前述のようにマイオールスはヴィレルムスの師であり、後継者オディオは

7 Cf. *Rodolfus Glaber*, xxiv-xxxiii.

ヴィレラムスの弟弟子、あるいは「この方（ヴィレラムス）が、あらゆる点で素晴らしい方、すなわち主なるオディオがまだ聖堂参事会士であったときに魂の真の救いについて語らうことがあった。この方（オディオ）が聖性の高みへと目指し始めているのを知り、ヴィレラムスは彼に、もっとも重要であると信じられることを出来る限り早く成し遂げるべく努めることを注意深く勧めた。すなわち現世の問題を投げ捨て、イエス・キリストにすぐに従うよう説いたのである。この明敏な方はすぐに悔い改められ、師父ヴィレラムスが説かれたことを喜んでなそうと約束された。すぐにオディオは誉れで名高きクリュニー修道院を訪れ、そこで聖マイオールスに熱心に迎え入れられ、敬虔なる行いの服をまとい、慣習に則って修道士に聖別された。この方の生活は神に大いに好ましく、神を愛する者たちには甘美であったので、至聖なるマイオールスは、自らに委ねられた（修道院の）共同体のためにこの方を終身（の院長として）選び、彼亡きあと師父として司牧者として有するよう取り図った」（*Vita*, x; p.280）というロドルフスの記述を信じるならば、「なかば弟子」と評することもできるかもしれない。ヴィレラムスと仲違いしてクリュニーに移ったにせよ、ロドルフスは同じ「修道文化圏」に留まっていたのである。そして終りにおいては、おそらく12歳のときに捧げられたオーセルのサン・ジェルマン修道院によって、ロドルフスは、「問題児」であったかもしれないが、クリュニーから来た修道士と同じように、再び「いつもの彼らの習慣のように、真心をこめて迎え入れられ」（*Historiae*, V, i, 8; p.226）、ここで晩年を送り、没したであろう。ロドルフスは必ずしも常軌を逸した「放浪修道士」ではなかったのである。

さらに『歴史五巻』は、さまざまな修道士が移動していたことを他にも示している。最も印象的なのはマイオールスであろう。彼もまた修道院の外へ旅していた。それを端的に示しているのは、彼が「サラセン人」に捕らえられたことである。889年から975年にかけて南仏ラ・ガルデ・フレネに拠点を有していたイスラーム教徒たちは、捕えたマイオールスの身代金として銀1000ポンドを要求した。マイオールスはクリュニーに宛てて「悪魔ベリアル」の群が私を取り囲み、死の罠が私を捕らえた。私と、私とともに捕らえられ

た者らのために身代金を送ってほしい」(*Historiae*, I iv, 9; pp.18-20) と手紙を認めた。ヴィレラムスがロドルフスを連れていたように、マイオールスも単独行ではなく、多くの随行者を従えていたのだ。留守を預かる修道士たちは修道院の装飾を剥がして資金を用意したという。

彼が捕らえられたのはイタリアからの帰途であった。マイヨールスはフランス国内のマルムーティエ修道院、サン・モル・デ・フォッセ修道院、サン・ピエール・ル・ヴィフ修道院、サン・ジェルマン修道院、レオム修道院、フェカン修道院などだけでなく、さらにスイスのペイエヌ修道院、ラヴェンナのサン・アポリナーレ・イン・クラッセ修道院、パルマのサン・ジョヴァンニ修道院、パヴィアのサンタ・マリア修道院、ローマのサン・ピエトロ・チエロ・ドーロ修道院、サン・パオロ・フオーリ・レ・ムーレ教会などの霊的指導に携わっており⁸、移動し続けていた。さらにその師である先々代クリュニー院長オードも、そのサン・パオロ・フオーリ・レ・ムーレ教会を「教皇と聖座のすべての聖職者の要請を受けて」、あるいは当時のローマの権力者アルベリコの要請により改革した。オードの死後、一時関係は薄れたが、クリュニーとこの修道院の関係は絶えなかったという⁹。サン・パオロ・フオーリ・レ・ムーレ教会をめぐる情報 (*Historiae*, I, iv, 14; p.28)¹⁰も、このクリュニー人脈を通じて得られたものかもしれない。

霊的指導だけでなく、修道士は医療のため旅することもあった。レオムのムーティエ・サン・ジャン修道院のヴルフエリウスは死の直前に「突然、彼の傍らに光り輝く聖母が立っておられた。はかりしれない輝きで煌いておられ、なぜ心がためらっているのか彼に尋ねられた。彼が聖母を見つめると、聖母はつけくわえておっしゃった、「もしおまえが道中のことを恐れているのなら、恐れる必要はない。なぜなら、私がおまえの導き手となるからです」」(*Historiae*, II, ix, 20; p.86) という幻視を授かるほど敬虔な修道士であっ

8 Cf. N.Bulst, 'Maiolus', in *Lexikon des Mittelalters*, VI, coll. 145-46.

9 Cf. J.Wollasch, 'Monasticism: the first wave of reform', in *The New Cambridge Medieval History, III*, T. Reuter (ed.), Cambridge University Press, 1999, p.178-79.

10 拙稿「ロドルフス・グラベルの『歴史五巻』における教皇と皇帝」67頁参照。

たが、「彼の修道院長の命令によって、サン・ジェルマン修道院の幾人かの病気の兄弟たちを診察するためオーセルに赴いた。彼は医術に精通していたからである」(*Historiae*, II, ix, 20; p.84)。

戦う修道士たちもいた。「サラセンの民が、その王であるアルマンスールとともに、アフリカから進撃し、ほとんどすべてのスペインを占拠し、ガリアの南辺にまで達し、キリスト教徒の虐殺を重ねた。しかしまったく劣勢の軍隊によってではあったが、「サンチョ（聖なる）」¹¹と呼ばれるナバーラ公グリエルモは彼らとしばしば戦を交わした。そのとき軍勢が劣勢であるため、この地域の修道士たちは武器を取らざるをえなかった。両軍に甚大な被害があった。ようやくキリスト教陣営に勝利が与えられた。兵を多く失ったあとで、サラセン人たちのうちで生き残った者たちはアフリカに逃走した。しかし、これらの長期にわたる戦争においてキリスト教徒の宗教者たちが数多く命を落とした」(*Historiae*, II, ix, 20; p.86)。また戦死者の遺骸を受け取る修道院長も描かれている。プロワ伯オード2世に対して「ライン川のこちら側を治める下ロレーヌ公ゴーズロンが大軍をもって彼に襲いかかり、オード軍を総崩れにしたが、両陣営に多数の死者が出た。その際にまさにオード自身も悲惨極まる死を遂げた。彼のばらばらの亡骸をシャロン・シュール・マルヌ司教ロゲルスは、尊ぶべき（サン・ヴァンヌ・デ・ヴェルダン）修道院長リカルドゥスとともに、殺戮の場からとりあげ（オードの）妻に返した」(*Historiae*, III, ix, 38; p.162)。『ロランの歌』のテウルパンのごとく、彼も戦闘に随行していたのかもしれない。修道士たちはさまざまな用務のため移動せざるをえなかったのだ。

ベネディクト修道士は「一所定住 *stabilitas loci*」を厳守するとされるが、この語はベネディクトゥス戒律にはそのままでは出てこない。ベネディクトゥス戒律には「定住」に関わると思われる個所が6つあるが、1)「神の指導から決して離れてはならず、その教えを守りながら死ぬまで修道院に留まり (*in monasterio perseverantes*)、忍耐を通してキリストの受難を分ち有

11 *sanctus* の俗語形。

し、キリストの王国の一員となるに値しなければならない」(序50；p.8)¹²、2)「修道士の第4の区分は放浪修道士(gyrogagum)と呼ばれる者で、彼らはその一生を通じて、さまざまな地域を、3日あるいは4日毎に、さまざまな修道房に泊まり、常に流離い、決して落ち着くことなく(numquam stabiles)、自らの意志と誘惑する食欲に仕え、あらゆる点々でサラバイテス派よりも悪しき者である」(第1章10-11；p.12)、3)「これらすべての(霊的な善き)ことを私たちが細心に行う作業場は修道院の禁域であり、共同体における定住 stabilitas in congregatione である」(第4章78；p.28)、4)修道生活を求めて新たに来る者が「定住について堅忍 de stabilitate perseverantiam を約束するならば、2か月後その者にこの戒律を順を追って読んで聞かせる」(第58章9；p.130)、5)修道院に住むことを望む司祭がそれを許可されるには「戒律の順守と自らの定住 de propriam stabilitatem を約束することを条件とする」(第60章9；p.136)、6)遍歴の修道士(monachus peregrinus)が「もし、その後、自らの定住を最終的に望むならば stabilitatem suam firmare、その意思は否定されてはならない。特にもてなされているときにその者の生活が見てとれた場合である」(第61章5；p.138)とある程度である。ある研究によれば「一所定住 stabilitas loci」という表現が初出するのはパスカシウス・ラドベルトゥス(860年没)の『詩編註解』とされているが¹³、Patrologia Latina Databaseで検索しても、「一所定住 stabilitas loci」という表現はアルクイヌスの頃から現れ¹⁴、「一所定住

12 Philibert Schmitz(ed.), *Règle de saint Benoît*, 5th.edition, Brepols, 1987, p.8 (以降、セミコロンの後にシュミッツ版の頁数を付すこととする)。古田堯訳「戒律」、上智大学中世思想研究所・野町啓編訳／監修『中世思想原典集成』5「後期ラテン教父」239-328頁参照(ただし本稿では私訳を用いる)。

13 Cf. Geraldo Veloso, OSB., *Usque ad mortem in monasterio perseverantes (Regula Benedicti pr. 50), The Obligation of Monks to Persevere and to Reside in Their Monastery. A Historico-legal Study of the Discipline in the West from the 4th to the 7th Century, Mainly on Monastic Rules, Conciliar Canons, Papal Decretals, and Imperial Constitutions*, Canon Law Dissertation at the Gregorian University, 1973, pp.485-87.

14 たとえば stabilitatem loci で検索すると、アルクイヌスの *De virtutibus et vitiis*

stabilitas loci」が表れる現存最古の修道誓願は11世紀のものであるらしい¹⁵。カロリング期という、修道院が王国体制のうちにすっかり組み込まれたときに¹⁶、この表現は初めて定式化されるのである。

『ベネディクトゥス戒律』にはむしろ第67章「旅に送り出された兄弟たち」のように、旅を前提とする規定が見られる。「修道院の外で見聞したことについては、他の者に何ごとも告げてはならない。ひじょうに大きな害があるから」（第67章5；p.154）にせよ、「同様に、修道院の禁域を敢えて出る、あるいはいずかに行こうとする、あるいはどれほど些細なことであれ、修道院長の命令なしに（sine iussione abbatis）行おうとするならば（戒律が定める罰に処す）」とあり、「修道院長の命令」があれば、移動できたのである。

また遍歴の修道士もすべてが悪いわけではない。前述のように「もてなされているときにその者の生活が見てとれた場合」には拒否されてはならないし、むしろ「（遍歴の修道士が）もし退去にふさわしいような者でなかったなら、もし望むのであれば、共同体の一員たるべき者として受け入れるだけでなく、留まるよう説得しなければならない。その者の模範によって他の者たちが教化されるようにである（第61章8-9；p.138）とあるように、評価されている。ロドルフスとほぼ同じ頃、東方から飄然と現れたアルメニア人修道士ポリローネのシメオン（1016没）でさえも、異端者と疑われるときはあったが、共同体に受け入れられ、死後数十年を経て列聖されている¹⁷。断罪すべきは根無し草のごとき「放浪修道士 gyrogagus」であり、精神において共同体に留まっていれば、師を求め修行の場を捜す修道士は必ずしも悪しき者ではなく、ときに模範とされたのである。

が、stabilitas loci で検索すると、パスカシウス・ラドベルトゥスの『詩編註解』がヒットする。

15 Cf. Veloso, *op.cit.*, p.495.

16 アイルランド系修道士の問題は、この点で興味深からう。

17 R. サザーン『中世の形成』（みすず書房、1978年）50-51頁参照。

2) 修道士はもてなす

修道士は旅するだけでない。ベネディクト修道士はもてなした。ベネディクトゥス戒律には、第53条「賓客に対する規定」もある。「訪れる賓客はすべてキリストのように迎え入れなければならない。なぜなら御自身がこのようにおっしゃっているからである。「私は賓客であった。あなたたちは私を迎え入れてくださった」」（第53章1；p.118）と最高の表現を用いている。続けて「食事についての節制を破ることができない重要な日はその限りではないが、食事についての節制は長上によって賓客のために破られ」（第53章10；p.118）、「賓客たちの手に修道院長は水を注ぐ。すべての賓客の足を修道院長と共同体は洗う」（同、11-12；p.118）。また「修道院長と賓客たちの台所は別でなければならない。それは修道院にまったくありふれたことであるが、予期しない時に訪れる賓客たちが兄弟たちを煩わせないため」（同16；p.120）であり、賓客たちの部屋には「寝台が十分に備えられていなければならない。そして神の家は賢明な者たちによって賢明に管理されなければならない」（同21；p.120）のである。

これらの賓客のもてなしは大変であった。特に「貧者と遍歴者（*peregrinorum*）の迎え入れには、最大限の配慮が示されなければならない。なぜなら彼らのうちにこそキリストは迎え入れられるからである。富める者たちの恐れそのものが、彼らに誉れを払わせるであろう」（同15；p.120）とあるように、おしよせる巡礼たちへのもてなしはかなりの負担であったようだ¹⁸。また身分高き賓客を迎えるための建物も建てられた。マイオールスの時代、981年に献堂された第2クリュニー聖堂は、その復元図に不明の点はなお多く存するが、賓客のための施設や俗人の墓地が存すると考えられ¹⁹、オディ

18 Cf. Fichtenau, *op.cit.*, pp.273-275.8

19 Cf. Anne Baud, 'Les plans de l'abbaye d'après K.J.Conant. Des fouilles à l'interprétation. Bilan', *Annales de Bourgogne*, 80(2008), pp.243-273.

ロは男性40名女性30名の高位の人々を収容する客室を建設したという²⁰。

『歴史五巻』でも巡礼が押し寄せるさまが記されている。修道院長マイオールスは、皇帝オットー 2世に推挙され、教皇座を提供されたこともある人物だが、死後も「彼の聖性の誉れのために、ローマ世界全体から、男も女も、俗人も聖職者も、数多くの者が押し寄せ、そこから様々な病を癒されるという恵みを得て帰」り、疫病が猛威を振るったが「聖人たちの多くの聖所において、この恐るべき疫病の治癒が見出されたとはいえ、もっとも多くの人々が集まったのは三人の聖なる証聖者の教会であった。すなわち、トゥールのマルティヌス、バイエルンのオドルリクス、そしてかの尊ぶべき師父マイオールスである。願いによって、治癒の恩恵が見出された」(*Historiae*, II, vii, 14; p.76) という。

修道院には、一時的な賓客だけでなく、長期にわたる滞在者もいた。「聖母マリアのお告げの祝日は5月25日に祝われているが、四旬節以外の他のあるときに、より適切に祝われうるかという、重大な問題が前述の司教たちによって提起された。なぜならば、幾人かの者によって、聖母マリアのお告げの祝日は、スペイン人の習慣に従って、12月18日にまったく非難されることなく祝うことができると主張されたからである。私がその後クリュニー修道院で他の修道士たちと過ごしていた頃、その地にスペインより多くの優れた行ない (*honestę conversationis more*) の修道士たちがやってきたが、彼らはそのときまで自分の国の習慣に従って暮らしていた。主の降誕の祝日が近づくと、前述の修道士たちは当院の院長であった尊師オディロに懇願して、彼らの習慣に従って、聖母マリアのお告げの祝日を祝うのを許してほしいと求めた」(*Historiae*, III, iii, 12; p.114.)。ときに摩擦を生じながらも、ともに暮らしていたのであろう。あるいは死後の魂の平安を求めて、多くの寄進とともに自らも捧げた俗人たちの姿も見かけられたであろう。

この点で興味深いのは、セルダーニャ伯ウィフレッドの死後の救霊を得るべく多くの修道院を経巡った「死者の書」である。彼はクーサのサン・ミケ

20 Cf. H. Fichtenau, *op.cit.*, p.273.

ル修道院の修道士となり、1049年に死去したが、その魂の平安を祈るべく、1050年2月から12月にかけて使者が遣わされた。「死者の書」を携えて彼はスペインを発し、フランスや低地地方あるいはドイツの多くの修道院や教会を訪れた。それらにはクリュニーは勿論のこと、ロドルフスが滞在したベーズも、また同じく『歴史五巻』で言及されるサン・ブノワ・デ・フルーリーなども含まれる²¹。このときロドルフスはすでに亡くなっていたであろうが、使者は祈りをもってもてなされたであろう。ベネディクトゥス戒律は賓客が訪れたならば「最初に一緒に祈り、このようにして平和のうちに互いに交わりを交わす。平和の接吻が最初に交わされないのは、最初に祈ることによって、悪魔の誘惑が入り込まないようにするためである。この挨拶そのものにおいて、深い謙遜が、あらゆる訪れる賓客たちに、あるいは去る賓客たちに対して示されなければならない。頭を下げ、あるいは地に全身を伏せよ。キリストはこれらの者のうちに崇められ、そして迎え入れられよう。迎え入れられた賓客は祈りへと導かれる。そののち長上あるいは長上に命じられた者がこれらの者たちと同席しなければならない。賓客たちの前で神の法（である聖書）が、この者たちの教化のために朗読され、こののちあらゆる謙遜が示されなければならない」（第53章4-9；pp.118-20）からである。

修道士の祈りが求められた。「この大いなる神秘のミサが、亡くなった信徒の魂にとってどれほど有益であるは、多くの機会に極めて証明されているが、さまざまの中でも特に一つの例を挙げよう。アフリカ²²の果てに1人の隠修士がいたが、彼については、20年間いかなる人の眼からもまったく隔絶し、手労働と草の根で生きていたと言われていた。マルセイユのある市民で、多くの地域を経巡る者たちの一人で、多くの場所を経験し見知らぬことを体験するのに飽きなかった者が、その地をたまたま訪れることがあった。

21 Cf. Florin Mazel, *Féodalités 888-1180*, Belin, 2010, pp.164-69; サザーン、前掲書、12-14 頁。

22 『歴史五巻』において「アフリカ」は必ずしもアフリカを指しておらず、漠然とイスラーム教徒が暮らす南方地域を意味していることがある。Cf. *Rodolfus Glaber*, p.74, n.2.

この者は、その隠修士の名声を聞き、孤絶し太陽の熱で焼け焦げた地に入り、その隠修士を長い間ひじょうに労苦を払って、見つけるべく捜し求めた。遂に、その隠修士が、自分を捜し求めている者を見つけると、(この隠修士は) 彼に呼びかけて、自分のところに来るように求めた。近づくと、この隠修士は彼に尋ね始めた、「誰で、どこから来たのか。何のためにここまで来たのか」と。すぐに彼は答えて、隠修士に会いたいという欲求に焦がれてここまで来たのであり、彼以外の何者も求めていないと言った。すると、神と語る人は次のように言った。「お前がガリアからここに来たことを私は知っている。しかし、願いがあるのだが、その地にあるクリュニー修道院を見たことがあるか言って欲しい」。(マルセイユ人は)「見たことがある。よく知っている」と答えた。すると隠修士は「知るがよい。ローマ世界のいづれにもまして、この修道院は悪魔の支配から魂を解放することにおいて際立って力があることを。ここでは、生命をもたらす犠牲がしばしば執り行われ、力があるので、悪しき霊の力から魂が奪い去られぬ日はほとんどない。まったく私たち自身が目撃したように、その共住修道院では、夜明けから夕食の時間まで、兄弟の多さゆえ、絶えずミサが行われるのが常であった。これらのミサはひじょうにふさわしく、また清らかに恭しく行われるので、人間が行っているよりも、むしろ天使たちが行っているように思えるほどであった」(*Historiae*, V, i, 13; pp.234-36)。

修道院は、このように旅するさまざまな人によって結びつけられ、訪れられ、あるいはもてなされ、多様なネットワークで結びつけられていたのである²³

3) 修道士は耳をそばだてる

もてなす際に修道士たちは「賓客たちに決して一緒になったり、話したりしてもならない」はずであったが、「許可があれば」その限りではなかった

23 このネットワークは、本稿では触れないが、もちろん学問や写本のネットワークと重なっている。Cf. Fichetenau, *op.cit.*, pp.294-300 ; Mazel, *op.cit.*, pp.164-69.

(第53章23：p.120)。実際には、彼らは外界に耳をそばだてていたであろう。『歴史五卷』には、その様子が思い浮かぶ場面がいくつかある。「同じ頃、オルレアン司教オドルリクスはそこ（聖地）へと出発し、彼が目撃し我々に語ったこと（quid uiderit nobisque narrauerit）は、見逃されるべきではない奇跡と思われる。復活祭の土曜日、（聖墳墓教会の祭壇の）火が神の驚くべき力によって現れるよう、すべての人々によって求められた日に、そこに他の人々ともにその司教も居合わせていた。すでに夕方になっていたが、突然、火が現われるであろうと期待されていた頃、一人のサラセン人の極めて愚かな道化者が、毎年いつもキリスト教徒とともに一つになって居合わせるのが常であった彼らの大群の中から大声をあげて、キリスト教徒のように、（火が）初めて見えたときに、「アイオス、キリエレイソン（主よ、われらを憐れみ給え）」と叫んだ。嘲るように大笑いをして、手を伸ばしてロウソクのあるキリスト教徒の手から奪い、逃げようとした。彼はそこで悪魔に憑かれ、不面目にも大いに苦しみ始めた。追っかけてきたキリスト教徒が彼からロウソクを奪った。彼はひじょうに荒々しく痛めつけられ、すぐにサラセン人たちの手の中で息をひきとった。このことはすべての（サラセン）人を同様の恐怖に追いやったが、キリストを崇める人々に喜びと歓喜をもたらした」（*Historiae*, IV, vi, 19; p.202）。

オドルリクスは聖地へ巡礼に行っただけでなく、ビザンツ皇帝コンスタンティノス8世（在位1025-28）の許に外交任務を負って東方に赴いたようである。これをロドルフスはペーズの修道院で聞いたのではないかと考えられているが²⁴、よく読むと『歴史五卷』には「噂 fama」という語がいくつか出てくる。モンテフォルテの異端に関連して、「この城には、ひとりの騎士がいたが、あるとき病に伏し、瀕死の床にあった。彼を見舞うために、あの異端者たちの城から、よくあるように、頭立った女がやってきた。だが実際にはむしろ、この悪のセクトがより知られるような結果となった。病人が伏していた家に、この女が入ると、この病人が見るに、この女とともに自分の

24 Cf. *Rodolfus Glaber*, xxx.

ところに真黒な衣服をまとい不吉な顔をした一群が入ってきた。この女は入ると、病人の額と胸の鼓動などを、習慣のように、手で調べ、彼がまもなく回復するであろうと告げた。女が家を出ると、その郎党も彼女とともに去り、その病人だけが残った。まもなく彼の傍には、前に見た黒い人々の集団がおり、彼に彼らの頭と見える者が話しはじめた。「余のことがわかるか、ユーグよ」と彼はいった。これは、その病人の名であった。「おまえは誰だ」と、彼はその者にいった。「力ある者のうちでもっとも力あり、富める者のうちでもっとも富める余が汝を助けに来たのだ。もし差し迫った死から汝を救い出し、汝が長く生きられるよう余が救うことができると信じ、そして余が約束することをもっとも確実なものと信じるならば、余の助けと努力によってコンラートが今や皇帝とされたことを知るであろう。汝も確かに知っているように、いかなる皇帝もこれほど速やかにドイツ全体とイタリアを自分の支配に服せしめた者はいない」。「私は知っている」と病人はいった。「長い間、私と他の人々にとって驚きであった」。それに最初の欺きの犯人（である悪魔）は付け加えた。「海の向こうにおいてさえ、余はギリシャ人の王国を、バシレイオスの後に、余に従順なミカエリスに授けなかったであろうか。それゆえ」、彼はいった、「余を信じよ。汝に、汝が欲するよりはるかに優れたものを与えん。汝自身を健康体に戻さん」。その頃、噂(fama)があって、そのミカエリスはバシレイオスの寝室係で、密かに毒を飲みものに混ぜ、彼を死に追いやり、彼の支配の王冠を疑いなく彼の死後に得たという。彼の帝国の支配は、充分善くはなかった。そのうち前述のユーグは正気に返り、右手で尊ぶべき十字架のしるしを切ろうとして言った、「私はイエスが神の子であることを証言する。私はイエスを崇め、信じ、告白する。私はおまえが、過去においてそうであり、現在そうであるように、欺きの悪魔に他ならないと信じる」。すると悪魔はこのようにすぐに言った、「お願いだから、腕を余に上げるな」。このようにして、すぐにこの集団はすべて煙のように消え去った。病人が声を限りに叫ぶと、家人たちが駆けつけた。彼は彼らに自らが見聞したことを順に語った。語り終えると、その日のうちに、日が沈む前に世を去った。何らの疑いもなく、これらのことを彼は自分自身の

ために、そして私たちのために見たのである」(*Historiae*, IV, ii, 5; p.178)。

あるいはローマ教会の「醜聞」に対して、ヴィレلمスを始めとして、多くの者が厳しく批判したとき「〔コンスタンティノポリス教会にふさわしからざる称号を与えようとする試みは〕決して成功しなかった。至高の真理である御方は決して欺かれることはない。〔主は〕断言しておられる、「陰府の力も、これに勝つことはないであろう（「マタイ福音書」16・18）」と。これらの首謀者たちは、鍵をかけたところで〔声を〕潜めてつぶやいて交渉したゆえ、自分たちがこの問題を処理できたとなお考えていたが、これらのことについてのすばやい噂（uelox fama）がイタリア全土を駆け巡った。このときいかなる騒動があったか、これを聞いたすべての者にどれほど激しい興奮があったか、言えないほどである」(*Historiae*, IV, i, 2; pp.172-4)。

あるいは聖遺物の出現について、「私が既に述べたように、世界全体が白く輝き、教会堂が立て直されると、それに続いて、すなわち救い主の受肉から数えて前述の千年紀から8年目に、さまざまな証拠のしるしによって、多くの聖人の聖遺物が、長らく隠されていたところで明らかにされた。それはあたかも復活の飾りをなすために、神の合図によって、信者たちの眼前に現われ、彼らの魂にひじょうな慰めをもたらしたかのようであった。この啓示はまずガリアのサンス市のサン・テティエンヌ教会において始まったことが知られている。その地に座していたのは大司教レオテリクスで、彼によって、語るも讃嘆すべきであるが、そこにおいて古えの聖人たちのしるしが発見された。隠れていた他の多くのものに混ざって、モーゼの杖の一部が見出されたと言われている。このことの噂に（ad cuius rei famam）、信者たちがガリアからだけでなく、ほぼイタリア全土から、また海の向こうからも集まった。同時に少なからぬ病人たちも聖人たちのとりなしによって健康になってそこから帰った」(*Historiae*, III, iii, 19; pp.126-28)。聖俗を問わず、噂に耳をそばだてていたことが見てとれよう。オルレアンの変端者についても、その断罪に居合わせていた前述のオドルリクスから聞いたのかもしれない²⁵。

25 Cf., *ibid.*, p.202, n.1.

また「海の怪異」鯨 (*Historiae*, II, ii, 2; pp.50-52)²⁶も、サン・ドゥニ修道院あるいはフェカン修道院の誰かから聞いたのかもしれない²⁷。

耳をそばだてていたのは、人間界の噂にだけではない。自然界にも耳をそばだて、目を見張っていた。ロドルフスは3回の日蝕 (*Historiae*, IV, ix, 24; p.210、*Historiae*, IV, iii, 26; p.212、*Historiae*, V, iii, 20; p.244) と1回の月蝕 (*Historiae*, V, i, 18; pp.240-42) を記録している。彗星についても「〔彗星が〕新たに神によって星として送られたのか、あるいは神によって、予兆のために、ある星の光が大きく増大させられたのかは、神ご自身しか知らない。神は、他のものを言い表すことができないしかたで、その叡智によって支配なされる。しかし最もあり得るであろうと思われることは、このようなことが人間に示されるたびに、世界においてまもなく或る驚くべき恐ろしいことが生じることをはっきりと示されることである」(*Historiae*, III, iii, 9; p.110)²⁸。好奇心と畏れとともに、彼らは世界を見つめ耳をそばだてていた。

4) 修道士は諍い、怠ける

穏やかに祈りの生活に専心しているはずの修道士たちも諍う。もっとも劇的な記述はサン・ブノワ・デ・フルーリー修道院長アッボが傘下のラ・レオル修道院を巡察中、「ある日、その共住修道院の中庭において、事件が起こった。数人の人々が諍い、怒りの刺激が燃え上がって、ひじょうに激しい騒動が生じたのである。そのため、ひじょうに敬うべき人、前述のアッボはその知らせを受け、その騒動を静めるために、書き板とペンを手に持ち急いだ。一人の平民が悪魔の霊に鼓舞されて突進し、彼の脇を槍で刺し貫き、この方をキリストの殉教者とした。その者は、言われるところによると、まもなく

26 拙稿「修道士の「ものの見方」—ロドルフス・グラベルの『歴史五巻』における幻視と奇跡を通じて」XXX 頁参照。

27 Cf. *Rodolfus Glaber*, p.51, n.5.

28 この問題については、拙稿「修道士の「ものの見方」—ロドルフス・グラベルの『歴史五巻』における幻視と奇跡を通じて」参照。

悪魔に憑かれ、悲惨に生涯を終えたという」(*Historiae*, III, iii, 11; p.112)。稀代の学者として知られるアッポは、修道院と周辺の住民の争いに巻き込まれて殺害された。やはり修道院長とは「権力者」であり、外界と対峙することがあった。

ロドルフスは、敬愛し師事したヴィレلمスを「神の人 uir Dei」(たとえば *Vita*, xi; p.282) と称えたが、この人物もやはり「権力者」「政治家」であった。ブルゴーニュをめぐって君侯たちが争奪戦を繰り広げていたとき、王ロベール2世は「これらについて尊ぶべき師父ヴィレلمスにディジョンで相談し、何をなすべきか問うた。まったく穏やかでいつくしみ深い人物であったので、自らのためだけでなく息子らのためにも、主にとりなしてくれるよう祈った。すると、以下のような返事を彼自身から(王は)得た。「思い出されるべきでしょう、おお王よ、あなたが若い頃、父母に対してあなたによってもたらされた不正と恥辱を。なぜなら、正しき裁き手である神のお許しによって、あなたが息子たちによって蒙ることこそ、あなたご自身がご両親に加えられたことなのです」。これを聞き、王はひどく苦しまれ、ご自身には罪があると叫ばれ、否定されなかった。そののち両地方における攻囲と劫掠ののち、両者は平和に戻り、しばらく平安が続いた」(*Historiae*, III, ix, 35; p.156) とあるが、実際には、両者の関係は緊張したものであった。

ヴィレلمスは多くの有力者を係累に有していた。彼の父ロベルトはイタリア王ベレンガリオ2世(在位950-62)の有力家臣であり、皇帝オットー1世(王在位936-73)が彼の代父であったという²⁹。またヴィレلمスはベレンガリオ2世の孫であるマコン伯オットー・ギヨームとも縁戚であったが、オットー・ギヨームはブルゴーニュ支配をめぐって王ロベール2世と抗争を続けていた³⁰。『ヴィレلمス伝』によれば、ヴィレلمスはイタリア王位を主張するイヴレア伯アルドゥイーノを支持して皇帝ハインリヒ2世と対立し、またブルゴーニュ支配をめぐっては「同じように、彼(ヴィレلم

29 Cf. *Rodolfus Glaber*, lxxiii.

30 Cf. *ibid.*, lxxiii-lxxxiv.

ス)について、フランス王ロベールに言上されたことは、王にまったくまつろわぬ前述のラングル司教ブルーノに彼(ヴィレラムス)が王の支配にまったく逆らうようなことを説いているということであった。王とまた彼の妻である王妃は、このことのため、彼に怒り、彼の共住修道院に大きな損害を与えると繰り返し脅した」(*Vita*, xi; pp.282-84)という。

諍いは政治のレヴェルだけではなかった。修道院の中でも繰り返されていた³¹。「やはり不思議なことが、オーセルのサン・ジェルマン修道院において起こったことを私〔ロドルフス〕は憶えている。そこにゲラルドゥスという名の修道士がいた。朝課の儀式ののち礼拝堂にとどまるのが、彼の習慣であった。ある朝、祈っているうちに眠り込んでしまうことが彼に起こった。彼はすぐにひどい眠りに打ち負かされたが、まるで死人のように修道院の外に運ばれてしまった。しかし、どのようにして、誰によってなされたかはわからなかった。言葉で言い表せないほど驚き、何が自分になされたのか、ようやくわかった。同じようなことが、その修道院で夜を過ごしたある司祭に起こった。それは聖人の多くの身体が安らぐ地下のクリプトで彼が眠り込んでしまったときであったが、雄鶏が時を告げる頃、彼は自分が修道院内陣の後ろに運び去られているのに気づいた」(*Historiae*, V, i, 7; p.224)。これは悪戯のようにもみえる。また「ある修道士がいた。彼は聖母マリアの祭壇で、これはひじょうに優れたことであるのは明らかであるが、しばしば祈り、悔い改めの嘆息と涙を流すのが常であった。だが一つ、彼にはほとんどすべての人にあてはまることがあった。祈りのあいだ、しばしば唾を吐き、涎をだらだら流し、睡魔に打ち負かされて眠り込んでしまうことがあったのである。すると祭壇の傍らに立ち、白く輝く衣服をまとい、手にひじょうに白く輝く布を持った人が彼に顕現した。彼は突然このような言葉を発して言った、「なぜ私をおまえ自身の唾を浴びせてなすりつけるのか。おまえも知っているように、私こそがおまえの祈りの捧げ物を受け、もっとも憐れみ深い

31 以下の部分の理解と翻訳は、拙稿「修道士の「ものの見方」—ロドルフス・グラベルの『歴史五卷』における幻視と奇跡を通じて」とは若干異なっている。ロドルフスを以前よりも「普通な人」と捉えている。

審判者〔であるキリスト〕の御前へと運ぶ者であるのに」と。この幻視に襲われて、この修道士は自らの身を慎み、他の者にも、できるならば、聖所では身を慎むよう忠告するようになった」(*Historiae*, V, i, 7; p.224)³²とあるのは、冗談めかした教化の1つのかたちであったのかもしれない³³。

だが深刻なものも存在した。「ある夜、朝課の集まりの前に、寝台の足の側から、忌まわしいすがたの小人のようなかたちをしたものが私の傍に現れた。その者は、私が認識しえた限りにおいて、小柄で、首は痩せ、こけた顔をし、眼はひじょうに黒く、額は皺多く狭く、鼻孔はつぶれ、口は広がり、唇は膨れ上がり、顎は落ちて尖り、顎鬚は山羊のよう、耳は毛深く先が尖り、髪は逆立ちばさばさで、歯は犬のよう、頭の後部は尖り、胸は膨れ、背は佝僂で、尻は垂れ、汚い衣服をまとい、震えてふらふらし、身体全体が傾いていた。私が横たわっていた寝台の端を掴んで、寝台全体を恐ろしいほど揺り動かし、そして言った、「おまえはこの場所にはこれ以上留まらない」と。私は慄いて目が覚めた。そして突然起こると生じるように、前に書いたものを私は見た。その者は歯を軋らせ繰り返し言った、「ここにおまえはこれ以上留まらない」と。直ちに私は寝台から飛び出し、修道院（の教会）に駆け入り、もっとも聖なる師父ベネディクトゥスの祭壇の前に伏して、大いに慄いて長い間横たわり、幼い頃から厚顔にもあるいは不注意で私が犯してきた違反や重大な罪をすべてひじょうに刺すように思い出し始めた」(*Historiae*, V, i, 2; p.218)。憎しみ。そして相互の嫌悪が反映されたイメージであろう。

さらに深刻なのは、「ディジョンのサン・ベニーニュ修道院に私〔ロドルフス〕がいたとき、それと異ならない、それどころか同じ〔悪魔〕が修道士の寝所において見られた。明け方に便所から走り出てきて、このように叫んだ。「私の見習い（*baccallaris*）はどこだ、私の見習いはどこだ」。翌日、ほぼ同じ時間にある若い修道士がそこから逃亡して去った。彼はきわめて軽率

32 池上俊一「天使の訪れ」が別なかたちで触れている。『西洋中世研究』第4号（2012年）28-49頁、特に31頁参照。

33 これはまた「修道士の笑い」という興味深い問題と関わろう。

で、テオデリクスという名で、修道服を捨て、暫らくのあいだ俗世で暮らした。彼はそののち心を改めて聖なる修道生活の誓願に戻った」(*Historiae*, V, i, 4; p.220) という、若い修道士の逃走を招いた事件である。修道院に蔓延していた同性愛の疑いもあろう³⁴。

また辛い節制や聖務日課に追われるベネディクト修道士ゆえの軋轢もあったであろう。「ある修道士に、ある夜、朝課の鐘が鳴らされるとき、ひじょうに忌まわしい者がそばにいるのが見られた。その者はその修道士に多くのことを説きこのように話した。彼は言った、「なぜおまえたち修道士は、これほどに労働し、これほどに徹夜と断食をし、のみならず苦行と詩篇朗誦や、他の多くの屈従を、他の人々の普通の実践を超えて、行っているのか。世俗の数え切れないほどの人間が、生の終わるまでさまざまな破廉恥行為を続けているというのに、おまえたちが期待するのと同じ安息を得ないのであるか。一日、あるいは一時間だけで、永遠の至福というおまえたちの正しき行ないへの報酬を得るには充分であろう。おまえ自身も、なぜこれほど案じているのか、私は不思議なのだが、鐘を聞くや否やすばやく寝台から飛び起き、眠りの甘美な安らぎを破るのか、3時課の鐘まで安らぎに浸ることができるというのに。ではここで、おまえにひじょうに注目すべき秘密を明らかにしよう。我々の側にとっては損失だが、おまえたちにとっては救いをもたらす救済策である。確かに、毎年、キリストが死者たちから復活し人類の新生をもたらした日に、彼によって地獄全体が略奪され、彼の者たちがまた天上へと連れて行かれるのである。このために、何もおまえたちは恐れるべきではない。気に入ったいかなる肉体の快樂と欲求をも、安心してなすことができるのだ」。これらの、そして他の多くのことを、悪魔はもっとも偽り多き者であるように、その修道士を騙して下らぬことを語り、誘惑した。そして、その者は、兄弟たちとの朝課の集まりにはいなくなった」(*Historiae*, V, i, 1; p.216)。

34 たとえば Peter Damian, Pierre J. Payer (trans.), *Book of Gomorrah: An Eleventh-Century Treatise against Clerical Homosexual Practices*, Wilfrid Laurier University Press, 1982 を参照。

そして誘惑は繰り返され「また三度目に、ムーティエ・サン・マリと呼ばれる共住修道院に私が滞在していたとき、ある夜、朝課の鐘が鳴らされ、私は労苦に疲れ果て、そうせねばならなかったのに、（鐘を）聞いてもすぐには飛び起きられなかった。私と一緒に数人の者が残った。すなわち、これらの者を悪しき習慣が誘惑したのであるが、他の人々は教会に急いだ。兄弟たちのあとを、前に示した悪魔が息を切らしながら階段を上り、背中に手をやり、壁に寄りかかって、二度三度このように繰り返した、「私はここにいる。私はここにいる。私はここに留まる者らと一緒にいる」と。この声に驚き頭を上げて見ると、二度それまですでに見た者であることに気づいた。3日目に、私が言ったように、密かに横になっているのが常であった兄弟たちの一人が厚顔にも修道院を出奔し、前述の悪魔の唆しによって、6日間修道院の外で俗人たちとともに騒々しく留まっていた。しかし、7日目にこの墮落した兄弟は受け入れられた」(*Historiae*, V, i, 5; pp.220-22)。観想に打ち込む徳高き修道士も多くいたが、やはり眠く辛く、怠けたい修道士もかなりいた。また出奔する者も後を絶たなかった。ロドルフスとは異なり、本当に放浪する修道士も『歴史五卷』には3名描かれている。

5) 修道士は誇る

修道院はさまざまな問題や利害が渦巻くところでもあった。諍いや痴情も絶えなかったろう。だが修道士たちは誇っていた。たとえばクリュニーは「至聖なる場クリュニー *ad locorum sanctissimum Cluniacum*」と称えられていた。「主の受肉から710年目（実際には1014年）の年に、（中略）使徒座の尊ぶべき教皇ベネディクトゥス（8世）によって、この権標が比喩的なかたちでつくられるよう命じられた。（この権標は）金の林檎のようにつくられ、いくつかのひじょうに貴重な宝石で四方を取り巻かれ、その上に金の十字架を据えるよう（教皇は）命じた。（中略）のちに前述の教皇が、このこと（戴冠）のためにローマに來た皇帝ハインリヒ（2世）に対して、（上級下級）両聖品の（聖職者の）大勢とともに、慣習のように、行列をつくり、

ローマの民全体の環視のもと、彼にこの皇帝の権標を渡した。(皇帝は)これを上機嫌で受け取り、しげしげと眺め、ひじょうに洞察力ある人のように教皇に言った。「すばらしい、聖父よ。これをつくるよう命じられたのですな。君主である余に、比喩を通じてしるしを明らかにされました。どのように自らを節しなければならないか、ひじょうに心を砕いてよく説き明かしてくださいました」。そして手でこの金の林檎を奉じ、付け加えて言った。「この林檎を所有し受け取るのに、世俗の豪奢を踏みつけ、救い主の十字架に従う用意ができて人々以上にふさわしい者はいない」。彼はすぐにこれをガリアのクリュニー修道院に送った。この修道院は、他にもましてもっとも敬虔であるところの頃みなされており、(皇帝は)他にもひじょうに多くの誉れと贈り物を与えていた」(*Historiae*, I, v, 23; pp.38-40)」。これ以上の場は地上には存在しなかった。「アフリカ」の隠修士が言うように、クリュニーの「ミサはひじょうにふさわしく、また清らかに恭しく行われるので、人間が行っているのではなく、天使たちが行っているように思えるほどであった」(*Historiae*, V, i, 13; p.236)のである。

そして、どれほど不平不満がたまろうと、どれほど軋轢が重なろうと、修道院は彼らの「故郷」であった。出奔しても戻り、同輩修道士たちは「兄弟 *fratres*」なのだから。ロドルフスは、同僚修道士たちを常に「兄弟」と呼び続けている。誇るべき「神の家」なのであった。